

【解説】

- ① ① a 「響」を「郷」と間違えないようにしましょう。
 ② ポイント《「よう」の識別ができるかどうか》
 ③ ① b 「見つけよう」と、力の「受けよう」は、意志を表します。オとキは推量、クは勧誘の意味です。
 ④ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ⑤ ② c の直前に「こういうわけだから」とあるので、これより前の部分に古典を人に推賞するのが難しい理由が書かれていると考えられます。第一段落に注目すると、筆者は「これは傑作だから読んでみなさい、と推賞されて読んでみたが一向につまらなかつた、というようなことが生じる」のは、古典が「一見退屈で平凡な」ものであり、「そのとき自分の心がそれに対して素直に入っていないようなときは、そこに書かれていることは全くありふれたこととしか思われたい」ものであるからだだと述べています。よって、イが最適だとわかります。
 ⑥ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ⑦ 筆者が『古今集』を読んだときの具体例が書かれている、第二・第三段落に注目しましょう。すると、第三段落に「そこには花だのホトトギスだの涙だの月だのばかり（|| ささやかなもの）が目について……失望してしまう」「必要なのは……花や月を大事にしていた精神そのものの構造（|| 巨きなもの）を知ることがだが、それは徐々にしか見えてこない」とあります。
 ⑧ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ⑨ ③ e 同じ段落で、筆者は「大事なすばらしい言葉というのは、実はそのへんにごろごろ転がっている当たり前の日常の言葉」であり、そのことに気づくと、「私たちの口について出てくる一語一語の大切さが、芯からわかってくる」と述べています。
 ⑩ ポイント《文章の内容を理解してまとめられるかどうか》
 ⑪ まず、「そういうこと」は、少し前の「日常用いているありふれた言葉が、その組み合わせ方や、発せられる時と場合によって、突然すごい力を持った言葉に変貌する」ことを指していることを捉えましょう。また、筆者は「そういうこと」が生じる理由について、最終段落で「我々が使っている言葉」を「氷山の一角」、「その言葉を発した人の心」や「伝わり合う他人の心」を「氷山の海面下に沈んでいる部分」にたとえ、言葉は「そういう深部（|| 人の心）をほんのちよびりのぞかせる窓のようなもの」であり、「私たちはそれ（|| 言葉）をのぞき込みながら相手の奥まで理解しようとたえず務めている」のだと説明しています。これらの内容を押さえて、指定の字数に合わせてまとめましょう。

4

【出題の意図と対策】

古文とその解説文の読解問題です。古典文学は、日本人の感性や独特の文化を創り上げる礎となった貴重なものです。ここでは、『徒然草』について、齋藤孝が解説を書いたものが題材になっています。古文は、かなづかいや表現法が現代文と違い、難解なものに感じられるかもしれませんが、作品を通して、古の人たちの心に触れてみましょう。

【解答】

- ① そうなきうまのり
 ② ② 例 道を知らない人は、これほど恐れるだろうか（20字）
 ③ ア・イ
 ④ A 問題が生じ
 B 解消してか

【現代語訳】

城陸奥守泰盛は、並ぶ者のない乗馬の達人である。従者に馬を引き出させたときに、馬が足をそろえて闕（厩舎の内と外との境に置いておく横木）をひらりと飛び越えたのを見ると、「これは気が立っている馬だ」と言つて、他の馬に鞍を置き換えさせた。また、馬が足を伸ばしたままで闕に蹴当ててしまうと、「これは勘が鈍くて、間違いが起きるだろう」と言つて、乗らなかつた。道を知らない人は、これほど恐れるだろうか。

（第百八十五段）

吉田という乗馬の名人が申しますには、「馬というのはみんな手強いものである。人間の力ではとても馬と張り合うことができないと知らなくてはいけない。乗る馬を、まずよく見て、その強い所、弱い所を知っておかなくてはいけない。次に、轡や鞍など馬具に危ないところがなければ、気にかかることがあれば、その馬を走らせてはならない。この注意を忘れないのが馬乗りである。これが、秘訣である」と言った。

（第百八十六段）

【解説】

- ① ポイント《かなづかいの知識があるかどうか》
 ② 歴史的かなづかいの「ア段の音十う（ふ）」は「才段の音十う（ふ）」に直しましょう。
 ③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ④ 『徒然草』第百八十五段の最後の一文で、兼好は「道を知らざらん人、かばかり恐れなんや」と述べ、城陸奥守泰盛の慎重さを評価しています。⑤の直後に「未熟な人であれば、これほど恐れないで乗つてしまひ、痛い目に遭つていたはずだ」とあることから、⑥には最後の一文を現代語訳した「道を知らない人は、これほど恐れるだろうか（いや、恐れなひ）」という内容が入ると考えられます。
 ⑦ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ⑧ ③ c の後の二段落の内容に注目しましょう。「恐れ」には、「とくに理由がないのに、漠然と抱く『恐れ』と、『問題やトラブルが起こりそうだ』と予測するために抱く『恐れ』の二種類があると説明しています。そして、「兼好は達人とは、後者の『恐れ』を感じとる能力のある人だというわけである」と述べているので、イが適切だとわかります。また、④の直前に「その道の達人であればあるほど注意深く、チェックが怠りない」とあるので、アも適切だと考えられます。ウは「恐怖で足がすくんで動けなくなつてしまうのとは違ふ」とあるので誤り、エのような記述は文章中にないので誤り、オは兼好のいう「恐れ」ではないので誤りです。
 ⑨ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
 ⑩ ④ d の前の四段落の内容から、何か事をしようとする場合には、「問題が生じる可能性のある、注意しなければならぬチェックポイント」を一つひとつチェックしてクリアにしていき、少しでもリスクがあれば、それを「解消してからはじめる」ことが重要であることを読み取りましょう。そうすれば、その道の達人と同様に「確信を持って、果敢にはじめることもできるのだ」と筆者は述べています。